

【Googleアップデート最新情報】 スマホ対応しているかどうかはランキング要因に！



モバイルユーザビリティ
対応ガイドライン

目次

はじめに	3
モバイルユーザビリティの問題を確認する方法	4-6
Googleサーチコンソールを導入している場合	
Googleサーチコンソールを導入していない場合	
タイプ別モバイル対応確認チャート	7
モバイル対応する方法の選択	8-12
モバイルユーザビリティの問題を修正する方法	13-20
ビューポートが設定されていない	
フォントサイズが小さい	
固定幅のビューポート	
コンテンツのサイズがビューポートに対応していない	
タップ要素 (ボタンやリンク) 同士が近すぎる	
Flashが使用されている	
まとめ	20
当資料の著作権について	21

はじめに

スマホ対応していないと検索順位が落ちる?!

Googleは、スマホ対応しているかどうかをモバイル検索のランキング要因として使用することを発表しました。

2015年4月21日からの導入を予定しています。

出典：[Finding more mobile-friendly search results | Webmaster Central Blog](#)

2014年11月以降、検索結果のページがスマホ対応している場合、ディスクリプション部分に「スマホ対応」と表示されるという変更が加えられていました。

スマホ重視の姿勢を明確に示しているGoogleですが、ついにスマホに対応しているかどうかをランキング要因として採用するそうです。スマホ未対応のサイト運営者にとっては、スマホ対応が急務になるでしょう。

「でもそんなに急にスマホサイトを作るなんてできない」というあなた、まずはGoogleが示すスマホ対応のガイドラインに最低限対応しましょう。1からスマホサイトを構築しなくてもできることはあります。

本資料では、自サイトの修正すべき点を調べる方法と、Googleのモバイルユーザビリティのガイドラインに沿った修正方法をご紹介します。

モバイルユーザビリティの問題を確認する方法

まずは自サイトが対応すべきモバイルユーザビリティ上の問題があるか、あるとしたら何かを確認します。

- ◆ Googleサーチコンソールを導入している場合
- ◆ Googleサーチコンソールを導入していない場合

Googleサーチコンソールを導入している場合

サーチコンソールに「モバイルユーザビリティ上の問題が検出されました」というアラートメールが届いた方がいると思いますが、そのアラートの内容をサーチコンソール上で確認することができます。

Googleサーチコンソール > 検索トラフィック > モバイルユーザビリティ
の順にクリックします。

Search Console

ダッシュボード

メッセージ

▶ 検索での見え方 ⓘ

▼ 検索トラフィック

検索アナリティクス

サイトへのリンク

内部リンク

手動による対策

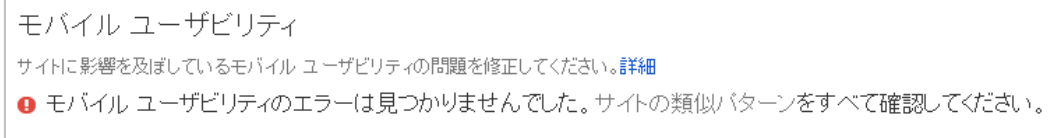
国際化 ターゲティング

モバイル ユーザビリティ

Googleが定めるモバイルユーザビリティのガイドラインに対応できていない場合、エラー項目が表示されます。



モバイルユーザビリティの問題がない場合、以下のように表示されます。



Googleサーチコンソールを導入していない場合

サーチコンソールに登録していない場合でも、自サイトのモバイルユーザビリティの問題を確認することができます。以下の方法で確認してください。チェックされる内容は前ページと同じです。

モバイルフレンドリーテスト (<https://www.google.com/webmasters/tools/mobile-friendly/?hl=ja>) にアクセスし、チェックしたいサイトのURLを入力します。

▼モバイルユーザビリティの問題が検出された場合

https://works.sagooo.com/client/lp_client3

通知 - ブロックされたリソースが 1 件あります

テスト日時: 2017/01/23, 18:07

このページはモバイルフレンドリーではありません

このページは、モバイル端末では使いにくい可能性があります

モバイルデザインの詳細

次の問題を修正してください

× コンテンツの幅が画面の幅を超えています

その他のリソース

- エラーの修正方法を確認
- サイト全体のモバイルユーザビリティの問題を表示
- モバイルフレンドリーページの詳細

▼モバイルユーザビリティの問題がない場合

https://promonista.com/

テスト日時: 2017/01/23, 18:09

このページはモバイルフレンドリーです

このページは、モバイル端末での使い勝手に優れています

GOOGLE に送信

その他のリソース

- サイト全体のモバイルユーザビリティレポートを開く
- モバイルフレンドリーページの詳細
- コメントや質問をディスカッショングループに投稿

タイプ別モバイル対応確認チャート

自サイトのモバイル対応の確認を行ったら、次に自サイトの状況別に対応すべき項目に進んでください。

①

サーチコンソールのモバイルエラー	ない	スマホ対応完了済です。
	ある	スマホ対応の必要があります (②に進む)

②

スマホ用サイト	ある (一部対応も含む)	モバイル対応していないページ		P.8 『モバイル対応する方法の選択』へ進む
		モバイル対応しているページ	モバイルエラーの設定ができていない	P.13 『モバイルユーザビリティの問題を修正する方法』へ進む
			モバイルエラー設定ができています	スマホ対応完了済です。
	ない	P.8 『モバイル対応する方法の選択』へ進む		

モバイル対応する方法の選択

自社サイトをモバイル構築する際にGoogleが提示する3つの方法からいずれかを選ぶこととなります。それぞれのメリット・デメリットを理解して対応しましょう

- ◆モバイル対応の3つの方法
- ◆レスポンシブ・ウェブデザインのメリット・デメリット
- ◆動的な配信のメリット・デメリット
- ◆別々のURLのメリット・デメリット

モバイル対応の3つの方法

サイトをスマホ対応させたい場合、Googleが提示する下記の3種の方法からいずれかを選ぶことになります。なお、方法によっては、同じコンテンツでもデバイスごとに別のURLやHTMLで配信することになります。

レスポンシブ
ウェブデザイン

1 URL
1 HTML

動的な配信

1 URL
2 HTML

別々のURL

2 URL
2 HTML

設定方法	URLの変更	HTMLの変更
レスポンシブウェブデザイン	なし	なし
動的な配信	なし	あり
別々のURL	あり	あり

レスポンス・ウェブデザインのメリット・デメリット

1つのURL・1つのHTMLで、デバイス環境ごとの画面サイズに応じてスタイルシートを切り替えて異なるデザインを表示する方法です。Google では、デザイン パターンとしてこのレスポンス・ウェブデザインを推奨しています。

レスポンス ウェブデザイン

1URL
1HTML

www.example.com



メリット

メリット	
URLが一つ	ユーザーがコンテンツを簡単に共有・リンクできる サイト運用管理が比較的楽 検索エンジンがインデックスしやすい
合理的なユーザビリティ	デバイスごとにカスタムされたコンテンツ配信が可能
閲覧デバイス毎の 対応が柔軟	ユーザごとに閲覧デバイスに応じて最適な表示が可能 サイト読み込みに時間が短縮でき、 パフォーマンスが改善する

デメリット

デメリット	
サイトデザインの制限	複数の端末で読み込めるようにするため、デザインに制限がある。
訴求力の低下の可能性が高い	デバイス毎に作り込むよりも、訴求力が落ちる場合が結構ある。
古いブラウザ利用ユーザーに 非対応	PC向けの古いブラウザには非対応

動的な配信のメリット・デメリット

URLは1つですが、アクセスするデバイスごとに異なるHTMLを配信します。Webサーバがデバイスの種類を検知して別々のHTMLを配信する方法で、「動的コンテンツ配信」あるいは「ダイナミックサービング」とも呼ばれます。

動的な配信

1 URL
2 HTML



メリット

メリット	
ユーザビリティをカスタムできる	デバイスごとにカスタムされたコンテンツ・レイアウトを設計・デザイン可能
変更が簡単	他のデバイスを気にせずに、特定のデバイスの画面サイズ向けコンテンツやレイアウトを作れる
読み込みが早い	合理的なコンテンツ作成でデバイスごとに最適な読み込み時間に調整できる
URLが1つ	レスポンシブルデザイン同様、ユーザは1つのURLで利用できる

デメリット

デメリット	
コンテンツが分岐する	同じコンテンツなのに複数のカスタムセットが存在してしまう。CMSがそれに対応していない限り、セット間のコンテンツ更新・同期が煩雑
運用の手間（コスト）がかかる	レスポンシブウェブデザインと比べて約1.5~2倍程度

別々のURLのメリット・デメリット

コンテンツは同じでも、PC用とモバイル用に（場合によってはタブレット用にも）、デバイス環境ごとに異なるURL・別のHTMLを配信します。

別々のURL

2 URL
2 HTML



メリット

メリット	
デバイスごとにユーザビリティをカスタムできる	他のデバイスを気にすることなく、最も自由にスマホ対応サイトを作れる
変更が簡単	他のデバイスを気にすることなく、自由にスマホ向けサイトを作れる

デメリット

デメリット	
URLが複数できる	デバイスをまたいだページ共有の際など、リダイレクトほか注意が必要 リダイレクトの際に余計な読み込み時間が生じる
コンテンツが分岐する	1つのコンテンツに2つ以上の異なるセットが存在し続けるため、データ管理が非常に煩雑

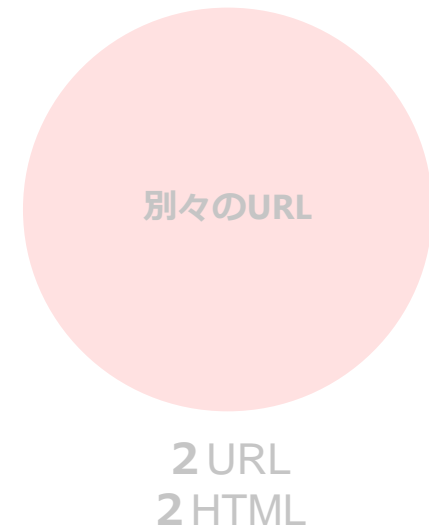
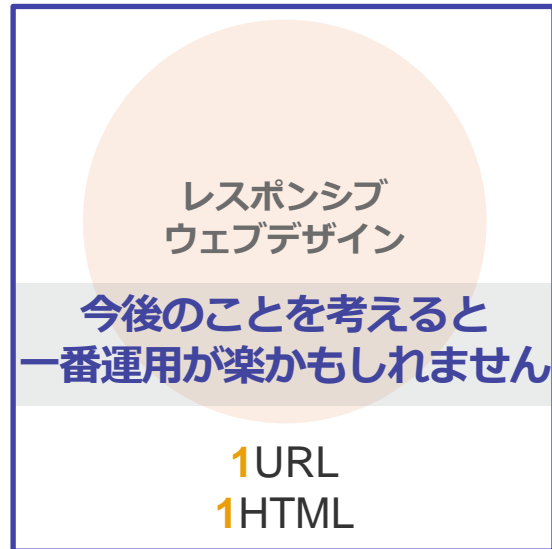
モバイルファーストインデックスについて

“ Googleは2016年11月5日にモバイルファーストのインデックス登録に向けた実験を開始しています。(中略) Google 検索のインデックスは、サイトやアプリについての単一のインデックスとして存続しますが、将来的に Google のアルゴリズムはモバイル版のコンテンツを主に使用するようになります。つまり、ページのランキングを決定したり、構造化データを理解したり、検索結果にスニペットを表示する際も、モバイル版のコンテンツが使用されるようになります。

[モバイルファーストインデックスに向けて | Googleウェブマスター向け公式ブログ](#) ”

モバイル版サイトがない場合 ▶ 引き続きデスクトップ版のサイトをインデックスする

モバイル版サイトがある場合 ▶ デスクトップ版サイトよりコンテンツが薄くとも、モバイル版サイトを優先してインデックスする



参考 : モバイルファーストインデックスについて今わかっていること - プロモニスタ
<https://promonista.com/mobile-first-indexing/>

モバイルユーザビリティの問題を修正する方法

Googleサーチコンソールで確認できるモバイルユーザビリティに関する項目は全部で以下の6つです。それぞれの内容と対応方法をご説明していきます。

- ◆ビューポートが設定されていない
- ◆フォントサイズが小さい
- ◆コンテンツのサイズがビューポートに対応していない
- ◆固定幅のビューポート
- ◆タップ要素（ボタンやリンク）同士が近すぎる
- ◆Flashが使用されている

ビューポートが設定されていない

ビューポートとは、サイトのスマホ最適化において重要なmetaタグのことです。そのタグをサイトのソース内に設置することで問題解決ができます。この後に紹介する問題もビューポートの設定によって解決できるものが多くあるので、真っ先に対応しましょう。

対応方法

ビューポートの未設定は以下をheadに入れ込むことで解決します。

```
<meta name="viewport" content="width=device-width, initial-scale=1">
```

ビューポートには、initial-scale のほかに次の属性も設定できます。

minimum-scale
maximum-scale
user-scalable

参考：ビューポートを設定する — Web Fundamentals

<https://developers.google.com/web/fundamentals/layouts/rwd-fundamentals/set-the-viewport?hl=ja>



ビューポートを設定するだけで、Googleがユーザーが見ている画面サイズに合わせてサイトのコンテンツを調整してくれます。例えばPCからの閲覧が多いサイトであっても、最低限ビューポートの設定はしておきましょう。Googleのためというより、ユーザーのために必要なことです。

フォントサイズが小さい

特にPCサイトをスマホで見ると感じる人が多いかと思いますが、ページの文字が全部小さすぎて、拡大しないと見えないといった場合に検出されます。

対応方法

さまざまな端末でフォントが期待どおりに拡大縮小されるように、まずはビューポートを設定します。

ビューポートを設定し、さらにしっかりと最適化したい場合は以下の追加の推奨事項を実装します。

- 16 CSS ピクセルの基本フォント サイズを使用します。
使用するフォントのプロパティに基づいて、必要に応じてサイズを調整します。
- 基本サイズに対して相対的なサイズを使って、フォントの拡大縮小を定義します。
- テキストは文字間に縦方向のスペースが必要であり、フォントごとに調整する必要がある場合があります。
一般的には、ブラウザのデフォルトの行の高さ 1.2 em をおすすめます。
- 使用されるフォントの数と拡大縮小を制限します。フォントの種類やサイズが多すぎると、
乱雑で複雑すぎるページ レイアウトになります。

参考：読みやすいフォント サイズを使用する - PageSpeed Insights
<https://developers.google.com/speed/docs/insights/UseLegibleFontSizes>



この問題はビューポートを設定することでほとんど解消されます。ビューポートを設定したのちに、微調整していくのが良いでしょう。

固定幅のビューポート

ビューポートタグのwidthの設定において特定の幅が設定されており、その値がコンテンツに対して適切でない場合に検出されます。固定幅のビューポートはコンテンツを思ったとおりに確実に表示させることができますが、ページをスマホ対応させる際の応急措置的に使うものであり、Googleのガイドラインでは推奨されていません。

対応方法

固定幅で設定したビューポートを設定し直す

どうしてもという理由がない限り、指摘されたページのビューポートの固定幅を適切に設定しなおしましょう。基本的には8ページで示したビューポート：`<meta name="viewport" content="width=device-width, initial-scale=1">`を採用し、デバイスの幅に合わせて表示させる様に設定しておけば良いでしょう。

参考：ビューポートを設定する - PageSpeed Insights

<https://developers.google.com/speed/docs/insights/ConfigureViewport?hl=ja>



Googleはスマホでも見やすいサイト（コンテンツ）を作るには、「小画面用に設計して拡大する※」という方法が最も簡単だと解説しています。どの画面サイズ（幅）で見られてもわかりやすいサイトにするのが、これからのスタンダードになるのでしょうか。

※以下のページの動画参考

レスポンシブ ウェブデザインの基礎 — Web Fundamentals

<https://developers.google.com/web/fundamentals/layouts/rwd-fundamentals/>

コンテンツのサイズがビューポートに対応していない

コンテンツがビューポートのサイズに合っていない場合、ユーザーはそのページを横にスクロールしながら見なければなりません。例えば、ビューポートよりも広い幅の画像がある場合などです。非常に不便なので、改善する必要があります。

対応方法

コンテンツをビューポートの幅に収まるよう調整する

画面サイズと CSS ピクセルの幅はデバイス間（携帯電話とタブレットの間や、異なる携帯電話間など）で大きく異なるため、コンテンツを適切に表示するうえでは、特定のビューポートの幅に依存しないようにする必要があります。

CSS でページ要素の width に大きな絶対値を設定すると、幅の狭い端末（iPhone などの、幅が 320 CSS ピクセルの端末）のビューポートでは div が広くなりすぎます。代わりに、**width: 100% などの相対的な幅の値を使用**してください。

参考：コンテンツのサイズをビューポートに合わせる — Web Fundamentals

<https://developers.google.com/web/fundamentals/layouts/rwd-fundamentals/size-content-to-the-viewport?hl=ja>



ビューポートが正しく設定できていても、サイトの中身によっては上手く表示されない場合があります。解像度の高い画像などがサイトの幅から飛び出していないか、注意が必要です。

タップ要素（ボタンやリンク）同士が近すぎる

リンクやボタンがお互いに近すぎる位置に配置されていると、誤タップにつながるためモバイルユーザビリティの低下に繋がります。ユーザーが誤タップしないようにリンクやボタンの近さと大きさを調整する必要があります。

対応方法

重要なタップ要素は押しやすいように十分大きくする

これはユーザーの使用頻度が高いタップ要素に適用します。例えば、よく使用される操作のボタン、検索バーやその他の重要なフォーム フィールド、主要なナビゲーション リンクなどです。これらのタップ ターゲットは7 ミリ以上（ビューポートを適切に設定済みの場合は 48 CSS ピクセル以上）にし、7 ミリ未満の場合は周囲に十分なスペースを確保してください。

小さいタップ ターゲットの間に十分なスペースを確保する

使用頻度の低いリンクやボタンは推奨サイズの7 ミリより小さくしてもかまいません。ただし、ユーザーが指でタップ ターゲットを押したときに誤って別のタップ ターゲットをタップしないように、水平方向と垂直方向で5 ミリ（32 CSS ピクセル）以内に他のタップ ターゲットを配置しないでください。

参考：タップ ターゲットのサイズを適切に調整する - PageSpeed Insights
<https://developers.google.com/speed/docs/insights/SizeTapTargetsAppropriately>



平均的な大人の指の大きさを想定した場合、スマホサイトのタップする部分の最小サイズは約7 ミリ（モバイル ビューポートを適切に設定済みのサイトでは 48 CSS ピクセル）だそうです。小さすぎるタップ要素を作らないよう注意が必要です。

Flashが使用されている

Flashとは、一般的に音声や動画、ベクターグラフィックスのアニメーションを組み合わせて作られるWebコンテンツを指します。一時期Flashは多くのサイトで使われていましたが、スマホでは表示されないため、ユーザービリティを大きく害する要因となります。

対応方法

アニメーションに HTML5 標準を使用し、すべてのユーザーが快適にサイトを閲覧できるようにします。

すべての端末で再生できる動画の埋め込みを使用します。動画の字幕を利用できるようにすることをおすすめします。そうすることで、ブラウジング支援機能を利用している人や、独自の動画形式を再生できないブラウザを利用している人が、サイトにアクセスできるようになります。

参考：再生できないコンテンツ - ウェブマスター向けモバイルガイド

<https://developers.google.com/webmasters/mobile-sites/mobile-seo/common-mistakes/unplayable-content?hl=ja>



つまり、Flashを使っている場合、スマホでも見れる形式のコンテンツに変更するか、一旦削除するか、どちらかの対応が必要ということです。

まとめ

まずは最低限対応すべき項目と修正方法をご紹介します。
スマホサイトの構築が難しいという方は、まずはビューポートの設定とFlashを使用している箇所の修正だけはやっておきましょう。

この対応ができていないと、順位が大きく変動する可能性があります。最悪の事態を避けるためにも、早急に対応することをおすすめします。

この数年の間にスマホからのアクセスがPCからのアクセス数を超えたという方も多いと思います。
今後もインターネット利用に対するスマホ利用の割合は増加していくことが予想されているため、今まで腰が重くてスマホ対応に取り組めていなかった方も、これをきっかけにスマホファーストなサイト作りをしてみてください。

本資料の参考サイト：

[【Google公式】モバイルフレンドリーウェブサイト](#)

[スマホサイトのSEO：モバイルフレンドリーテストと対応方法](#)


[モバイルフレンドリーアップデートの影響と重要なGoogle社員の発表まとめ※対応方法のガイドラインつき](#)


[モバイルファーストインデックスについて今わかっていること](#)

当資料の著作権について

当資料の文章や画像について、株式会社ウィルゲートから
未承諾で複製するなど、企業秘密の開示を禁じております。
何卒ご了承くださいませ。



お電話でのお問い合わせはこちら
 **0120-4800-72**

Webからのお問い合わせはこちら
 <https://www.willgate.co.jp/contact/>
※お問い合わせには必ず1営業日以内にご返信いたします。